大学帰属感尺度 (SUM-6) の開発

○奥田 亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子
(大阪樟蔭女子大学)

キーワード：大学への帰属感，尺度，大学への適応

Development of Sense of University Membership Scale (SUM-6)

Akira OKUDA¹, Masahiro KAWAKAMI¹, Hiroyuki SAKATA¹ and Yuko SAKUTA¹

(¹Osaka Shoin Women's University)

Key Words: sense of university membership, scales, adaptation to university

目 的

リスクのある学生にとって、学校への帰属意識やその一員であるという意識が、学校への参加やリテンションにおける潜在的な決定因であるとされている (Goodenow, 1993)。筆者らも、大学生活における学生の充実感や満足感に関する研究 (例えば坂田他, 2006, 佐久田他, 2007) を進める中で、大学への帰属感が大学生活に対する充実感を高めることと関連する (佐久田他, 2008) という知見を得た。そこで、大学への帰属感を高める教育プログラムを開発し (川上他, 2009, 等), 帰属感尺度 (川上他, 2009) と大学生生活充実度尺度 (川上他, 2005; 後に奥田他, 2010) を用いて、その効果を測定してきた (川上他, 2016, 等)。また、学年進行に伴う帰属感や大学生生活充実度の推移の調査も継続的に行ってきた。その中で、筆者らは大学生生活充実度尺度 (SoULS-20) の信頼性および妥当性を検討し開発を行った (佐久田他, 投稿中)。これに伴い、上記の一連の研究に用いられた帰属感尺度についても再検討を行うこととした。

帰属感の測定に関しては、Goodenow (1993) の Psychological Sense of School Membership (PSSM) scale があるが、これは大学生を対象として作成されたものではなく、項目数も比較的多い。また、帰属感尺度は単独で用いるよりも、不適応感などの他の指標と共に用いることで、活用の幅が広がると考えられる。そのため、調査対象者の負担軽減という観点から、本研究では、大学生を対象とした項目数の少ない施行の簡便な尺度を新たに作成することを目的とする。すなわち、上記の一連の研究で用いられた帰属感尺度の 14 項目を再精査し、厳選された項目からなる大学帰属感尺度の開発を行う。

方 法

調査対象者 大学生 626 名 (男性 131 名, 女性 494 名, 性別不明 1 名, 平均年齢 20.3 歳, 標準偏差 1.30) を対象とした。

質問紙の構成 (1) 帰属感尺度: 川上他 (2009) の作成した尺度 (14 項目 5 件法) を用いた。(2) SoULS-20: 大学生生活の充実度を測定する尺度 (佐久田他, 投稿中; 20 項目 5 件法) を用いた。

手続き 大学の授業時間内に集団法で質問紙を実施した。

結 果

帰属感尺度 (川上他, 2009) の 14 項目について、最尤法を用いた因子分析を行った。因子負荷量の低い項目を除外しながら繰り返し因子分析を行ったところ、1 因子構造であるという結果が得られた。

次に項目数を減らす目的から、因子負荷量の高さ、分布の尖度および歪度の絶対値の小ささ、項目削除時の α 係数の高さを考慮に入れながら、最終的に 6 項目を尺度項目の候補として残した。この 6 項目について、再度最尤法による因子分

析を行ったところ、改めて 1 因子構造であることが確認された ($\alpha = .93$)。

そこで、この 6 項目を「大学帰属感尺度 (Sense of University Membership scale; 6 items: SUM-6)」と命名し、Amos を用いた確認的因子分析を行った。その結果、適合度指標は $\chi^2 = 46.96$, $df = 9$, $p < .001$, GFI = .98, AGFI = .94, RMSEA = .08, AIC = 70.96 であった (Table1)。

次に、SUM-6 の平均値を尺度得点とし、SoULS-20 (佐久田他, 投稿中) の 4 下位尺度得点との相関係数を算出した (Table2)。その結果、SUM-6 の得点と SoULS-20 の各下位尺度との間に 0.1% 水準で有意な正の相関が認められた。中でも「学業満足」「大学へのコミットメント」「交友満足」との関係は比較的強いことが明らかにされた。

比較のために、14 項目の帰属感尺度 (川上他, 2009) と SoULS-20 の各下位尺度との相関係数も算出した (Table2)。

考 察

帰属感尺度 (川上他, 2009) より抜粋した 6 項目の α 係数が高い値を示したことで、また確認的因子分析の結果から高いモデル適合度が得られたことより、SUM-6 の信頼性は十分高いと言える。また、大学生生活充実度尺度のうち、学業、交友関係、大学へのコミットメントという、帰属感に規定される可能性が高い要因との相関が示されたこと、その数値は川上他 (2009) による 14 項目の帰属感尺度の相関とほぼ変わらない値であることから、妥当性についても十分認められたと言える。

今後の課題として、この SUM-6 を用いて、実際の大学生生活の適応に関わる諸指標 (学業成績、課外活動の状況や退学等) と大学への帰属感がどのように関連するのかを調査・分析し、尺度の実用性について検討することが挙げられる。

Table1 SUM-6 の確認的因子分析結果

	標準化推定値
この学科に愛着がある	.85
この学科に誇りを持っている	.82
この学科が自分の居場所だと思える	.90
この学科にいる自分が好きだ	.87
この学科の一員であると感じる	.77
この学科に入ってよかった	.77

Table2 SoULS-20 各下位尺度と SUM-6 の相関

	SoULS-20 下位尺度			
	大学への コミットメント	交友満足	学業満足	不安のなさ
SUM-6	.54	.48	.64	.30
帰属感尺度(14項目)	.56	.54	.68	.31